

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和5年4月21日(金)

# みんなの居場所

## 新年度がスタートしましたね。

子供達を眺めてみると、学年が一つ上がっただけのなかに、自覚が行動に現れているような気がします。特に6年生にはそれが顕著です。

13日(木)は始業式、14日(金)は入学式と行事のラッシュで、子供達も松達も、暫くの間は慌ただしく過ごしていました。6年生には多くの行事で先頭に立ち、活動をしてもいいわけにはなりません。その中で経験を積むことになって更に成長していきます。時間の経過で自身の置かれた立場が人を成長させていくのです。他の学年も一つ学年が上がったといて自覚を持ち活動していくことも頼もしく思います。今年もこんな活躍を見せてくれるのか、今から楽しみです。

## 分がっている人は分がっている。スモホとの付き合い方

スモホの功罪については以前のお便りでも何度か紹介しました。持たせる持たせない関係なくこのような扱いをすればスモホ等のタブレット端末に振り回されるので済むか、分がっている人は分がっています。上手に使っている人たちは、やはり家族の中でも取り決めがあってそれが機能しているのです。扱う時間や場所、内容についても細かく決められており、それを家族全員が守っています。反対に、分がっていない人や家族は、場所、時間、内容等に関係なく使います。家族団らんの時間にスモホをいじるまでどう思いますか。また、スモホ依存の大人が食事の時間に話もせず、スモホをいじりながら食べている。子供は大人に「おかわり」とも言えず自分のご飯のおかわりに「おかわり」をいじりながら食べている。どう思いますか。

「先ず、娘(現在の5歳)は、彼女が高校入学と同時に持たせました。私との間で契約書(裏面参照)を交わし、その中で細かな取り決めをしました。でも、それでも契約書の内容が徹底できず、持たせない方が良かったかなと感じる場面もありました。双子の息子(現在小学3年)には高校入学後は持たせませんでした。まあ、部活をやっていたので、その連絡のために必要だと頼まれた。妻にも同様にお願いした。初めはタブレット端末だけ、しかも、居間しか使わないという約束を締結して使わせていました。それが良いのか悪いのか、その時の状況によって判断は変わって来ます。子供自身に思慮分別というものが備わっていく必要が有ります。その後、高校の学習サポートで必要だといつて、本人でなく妻が訴えてきましたので、配付された文書を読み直し、高一の夏にスモホを持たせました。娘の小さな契約書は交わしましたが、彼らにはスモホの事もよく理解し、活動に打ち込んでいたので、その必要性も無かったです。現在の高等学校では、スモホ等のタブレット端末のみの学習も進路指導が行われていますので、持たせて、ルールを徹底していく局面が来るとは思います。頭が痛いですが、最善策を考へる必要が有ります。

色々な話を聞きます。親のスモホを使っても、友達同士でラインをやっている…。色々な事情があるとは思いますが、これは如何なものでしょうか。こういった場合、私の経験的には必ず早い時期にスモホを持つことになり、そのかわりに小学生時代から誕生日のプレゼントで買ってもらってスモホを持つことになり、危険性を理解させることなど、写真を送ったり、動画をアップしたりするおうちになります。そして思春期、当然のおうちに異性に興味を持ち始め、あらゆる方向へ進んでいきます。そんなおうちもいつか来るとも思いません。将来までも進んでいくのです。怖いですね。だから私は子供達に「分がっている人は分がっている」とも言えず自分のご飯のおかわりに「おかわり」をいじりながら食べている。どう思いますか。

## シリーズ「自分を語る」#84

さて、国際課での仕事は勉強にもなりましたが、非常に思い出深い仕事も出来ました。また、世界中に友人が出来たことも収穫です。その中の一人、韓国の研修員を受け入れる手続きが開始されました。

当事、熊本県は将来的な戦略のために、総務省が美施母体の「自治体職員協力交流事業」(GOTP)に参加していました。当該年度に受け入れる研修員は、韓国の獣医さんでした。獣医さんではありますが、韓国の行政マンでもあり、熊本の畜産や防疫の技術を学びに来られるためでした。私、「そんなんだあ…」と納得しながら仕事を進めていました。そんな時に、重大な事件が起こります。韓国で「鳥インフルエンザ」が発生したのです。それが重大な問題という認識が私には無く、肅々と事務手続きを進めていました。(本当は遅延として進めませんでした)が、その日の、熊本の直接の研修員受け皿である「畜産課」からストップが！畜産課の担当者の言いは「インフル」がインフルインザが発生した国から、しかもその防疫の最前線にいる獣医さんを受け入れることは、果敢として進めません。「そのおそれ、私もその思いま

した。ところがこの事業、国家間の取組もあり、その簡単に受け入れは拒否できません。それに、この獣医さんは派遣に際し、健康診断もきちんとして来られます。というところは、視点を委ねれば人権問題にも発展しかねません(私は感じました)。話の切りが平井線までで、中、という課長同士の調整となりました。その中で、あっさり受け入れが快諾され、事務手続きがスムーズになりました。私は「在留資格認定証明書交付申請書」なる物の準備を進めており、そこからスムーズに手続きが進んでいきました。当時、この申請書は福岡入国管理局に持参しなければならず、お隣に座っていたスペイン語の通訳さんに持参して頂きました。程なく許可が下り、研修員本人は来日となっていきました。LOGOPの研修員は来日後、東京でオリエンテーションを受け、その後、滋賀県にあるJ-AM(全国市町村国際文化研修所)にて日本語研修を受けました。その間は通訳が傍らにいらついでいますので、生活に事欠きませんでした。来日後、東京での歓迎セレクションでは緊張感もありましたが、どこかに対面したことを思い出します。

その後の月、いろいろな韓国の研修員をJ-AMまで迎えに行き、来られました。研修員受け入れ業務は、担当者である私だけに行わなければならない。大阪まで飛行機、J-AMまで滋賀県大津市へ。そこで研修員をピックアップし、帰郷です。研修員の出発までの間、韓国語の勉強に取り組んだ私澤田。研修員の名前は「崔 連徹さん」(チェヨンチョルさん)です。マンニョンハセヨ...、ここからは、これは、おはよう、おはよう...、何話せたいですか、(ハハ)